中嶋嶺雄さん（国際教養大学学長 国際社会学者）

とうほく彩発見

市町村合併で消える地名

文化の象徴捨てないで

財政上の優遇措置がついた市町村合併特例法が来年3月末を期限にしていることから、市町村合併の動きが全国各地でいよいよ加速化している。地方交付税を盾にした地方自治への国の関与を減らすかわりに、税源を地方にできるだけ移譲して国と地方の税財政を見直すという当面の「三位一体改革」は、地方にとっての大きなチャンスでもある。いずれにせよ、地方交付税の減少とともに、地方自治体の財政はきわめて厳しくなるだけに、行政のスリム化・効率化のためにも、市町村合併は避けられないところだという。

こうして財政上の理由を主に当面の市町村合併が進められるのはやむを得ないとしても、もう一つ重要なのは地方の文化という観点でなければならない。なぜなら、これからの時代には国際化やグローバル化がさらに進展するであろうことは明白であり、そのような国際化・グローバル化の時代にこそ、ローカルなアイデンティティーつまり歴史と伝統に根付いた地方色がますます重要になるからである。地方色が豊かであればあるほど、国際的な通用性をもつだといってもよい。

そこで地方色というからには、まず第一に地名である。地名といえば最近、埼玉県の県都まっている。山梨県中巨摩郡西部の6町村が昨年4月に合併して「南アルプス市」となったのは好感がもたれるけれど、この辺りは南アルプスの眺望が大変美しく、私自身が山登りをするからなのかもしれない。

ひるがえって私が現在お世話になっている秋田県は、自然はともかく、文化的には実に賢明な選択であった。アイヌ語のケマ（漁具）どナイ（谷、川）に由来するばかりか、県南の西馬音内盆踊りに次ぐ地方色豊かな盆踊りで知られた県北の毛馬内町が消えて十和田町となり、現在の鹿角市になったのは残念ではあるが、もうかなり以前のことである。日本一の花火でも知られている大曲市がこれから、羽州街道の本陣としての中世以来の郷村名を捨てて、仙北7町村との合併で「大仙市」になるというのだが、そんな地名だけは、秋田県の名誉のためにもぜひ避けてほしいものである。

リプトンは国際教養大学のゲストハウスにもなっているけれど、その地名も河辺町「戸島」字「上祭沢」というゆかしいものだ。

こうして秋田県には地方色豊かな地名が多い。松尾芭蕉が「奥の細道」の目的地とし、そこに辿り着いて「象潟や雨に西施がねぶの花」と詠んだ象潟町が仁賀保町、金浦町との合併協議を離脱して「象潟」という歴史的地名を守ったのは、行政上はともかく、文化的には実に賢明な選択であった。アイヌ語のケマ（漁具）どナイ（谷、川）に由来するばかりか、県南の西馬音内盆踊りに次ぐ地方色豊かな盆踊りで知られた県北の毛馬内町が消えて十和田町となり、現在の鹿角市になったのは残念ではあるが、もうかなり以前のことである。日本一の花火でも知られている大曲市がこれから、羽州街道の本陣としての中世以来の郷村名を捨てて、仙北7町村との合併で「大仙市」になるというのだが、そんな地名だけは、秋田県の名誉のためにもぜひ避けてほしいものである。

町の「椿川」字「奥椿岱」にある。「岱」は中国の有名な「泰山」を意味しているが、おそらくこの辺りには椿が多かったのであろう。私の宿舎プラザ・ク

なかじま・みねお　1936年長野県松本市生まれ。東京大学大学院修了、社会学博士。95～01年東京外国語大学長。カリフォルニア大学客員教授などを歴任。現在、文部科学省中央教育審議会委員（大学院部会長・外国語専門部会主査）。著書に「北京烈烈」（サントリー学芸賞）、「国際関係論」など。03年度「正論大賞」受賞。